

女たちの声：『フィーメールマン』を読む

奈良県立医科大学医学部看護学科

勝井伸子

Women's Voices: Reading *The Female Man* by Joanna Russ

Nobuko Katsui

Nara Medical University School of Medicine Faculty of Nursing

1970年代を代表する女性SF作家であるJoanna Russは、その実験的手法と攻撃的なフェミニズム運動家としての活動で知られている。従来、文学史では大衆文学として無視されてきたSF小説の領域は、同時にきわめて男性的な領域と考えられてきた。しかし、SFには女性にとってきわめて有利な装置がある。従来社会における女性を描く小説では不可能な、まったく新しい、または違った女性像を示すことが、SFにおいてのみ可能となるからである。SFが大衆文学から新しい文学形式へと成熟した60年代以降、同時に起きた女性解放運動を背景に、多くの女性SF作家が現れたが、その多くは一時的な現象として読まれなくなった。本論では、Russの代表作*The Female Man*に、どのような女性にとってのユートピアまたはディスとピアが、どのように提示されているかに焦点をあて、彼女の問題提起はいまなお有効なのかを考察する。

キーワード：Joanna・Russ SF フェミニズム ユートピア

1. 女性作家とSFジャンル

初めてのサイエンス・フィクション作家と呼べるのは実は女性であった。Mary Shelleyは、*Frankenstein*(1818)で、科学による人造人間を描き、*The Last Man*(1826)で疫病が人類を破壊する物語を描いた。しかし、彼女以降の多くの女性作家達のゴシック風の超自然現象を扱う小説は多いに読まれたが、文学史上その名をとどめることはなかった。

その後半世紀以上にわたって、女性のSF作家は存在していたものの、HGウェルズらを源流とするSFジャンルは圧倒的に男性の領域とされていた。60年代に、そ

れまでいわゆるパルプフィクションと呼ばれる大衆小説としてのみ認識されてきたSF小説が、社会批判の諷刺小説として変容し、またいわゆる「ニューウェーブ」SFのように哲学的実験としてSFというジャンルを利用する作家たちが脚光を浴びるようになった。また、60年代のアメリカを揺るがせた性の革命と女性解放運動を反映した女性SF作家たちが、主流SF作家として、ヒューゴ・ネビュラといった賞を受賞して、一躍認知されるようになった。その代表的な作家がUrsula Le Guinや、本論で取り上げるJoanna Russである。Pamela Sargentは、「サイエンス・フ

イクションだけが、そしてその変形としてのファンタジーだけが—女性にまったく新しい、あるいはまったく別の状況に置かれた女性像を示すことができる」

(Sargent,16) と主張する。70年代女性SF作家を代表する存在が Russ であり、彼女こそが「明らかに、攻撃的なほどに、フェミニストである」(Sargent,16)作家と位置付けるならば、フェミニスト・ユートピア・SF小説である Russ の代表作 *The Female Man*(1975) を、35年という時間を経て再読することで、Russ の作品に21世紀の読者は何を読み取れるのか、それは21世紀にはあてはまらないのか、彼女の問題提起は今も有効なのかを考えてみたい。

2. ジャンルとしての SF

The Female Man は、「まったく別の状況に置かれた女性像」を描いた実験的な作品と言えるだろう。Robert Scholes は、*The Female Man* は現実の女性の人生と「ありうるかもしれない人生」とを対比させ、「極端に異なるいくつものライフ・スタイルを一つの場に形象化した」ことによって、「SFのユニークな可能性」を引き出したのであり、「これは現在の人間行動の慣習に縛られた小説では、とうてい表象しようのなかったものである。」(Scholes,97)として、Russ の独創性を評価している。現実世界と近未来の世界、違う過去から発展したもう一つの世界、遠い未来の世界の女性たちが交錯するという、SF、幻想小説においてのみ可能な手法を Russ は利用したわけである。

3. ジャンルとしてのユートピア小説

文学ジャンルが提供する「場」として Russ がもう一つ利用したのは、ヨーロツ

パ文学伝統に長く成立してきたユートピア小説という文学ジャンルである。

理想の社会にユートピアという名前を与え、ユートピア小説ジャンルを創始したのは言うまでもなく Thomas More の *Utopia* (1516)である。More は「場所」を意味するトポスという語根から造語したのであるが、その接頭辞は「良い」を意味する「eu」とも読めるし、「無い」あるいは「否定」を意味する「ou」とも読めるのである。モアは彼の造語が多義的であることを自覚しており、それに気づかれない場合に備えて、彼の書いたラテン語のテキストにある4行詩に言語的パラドックスを仕込んでいた。彼はユートピアを、ギリシャ語で「良い場所」を意味する eutopia と、「無い場所」を意味する outopia のどちらをも指すと詩の中で説明している。従って、ユートピアは到達できないことを示唆するだけでなく、「良い」という評価をも含むことになる。More 以来多くのユートピアの定義の試みはなされてきたのであり、ありそくない夢想から、今は無いが実現可能な未来まで、その範囲は広く、現在でも、ユートピアの定義には決定的なものはないといってよい。そして「良い」が「無い」場所への抑えきれない希求が、ユートピア小説の豊かな多義性をもたらしていると言えるかもしれない。

4. 新しい空間を構想する家父長制の言語

「無い」が「良い」場所を希求するのは当然の欲求であると言えるだろう。人間はこれまで長い間、より良い未来を夢見て、より良い世界を想像してきた。Oscar Wilde は進歩とユートピアの実現の関係について、「ユートピアを含まない世界地図は、

目をくれる値打ちもないものである。(中略) 進歩こそがユートピアの実現なのである」(Wild,27)と述べた。この進歩=変化にとりわけ強い関心を抱いたのが、家父長制社会の変革を「夢想」し「希求」する女性作家達であることは意外なことではない。

Mizora (1890) や *Herland* (1915) など、Russ 以前にも少数だがフェミニズムユートピア小説は存在した。しかし、Russ らに代表される 1970 年代のフェミニストユートピア小説は、荒唐無稽な夢想でなく、「社会の家父長的秩序を暴き、新しい概念空間を提供する」(Teslenko,ix) 性質を持っていた。この「新しい概念空間」の記述と、言語形式が内包する既存の家父長的価値観との軋轢は、困難と同時に革命的な意識変化をも、もたらした。例えば性別を特定しない人物を指すときに無意識に用いられてきた”he”は中立性を失い、言語形式の内部に隠蔽されていた家父長制度の価値観が前景化されることになる。フェミニストは、家父長的言語によって、家父長的価値に異議申し立てを行うという逆説的行為の困難に直面する。歴史は history であるから his story (彼の物語) であって her story (彼女の物語) ではない、というおなじみのフェミニスト言説が始まるのである。困難ではあるが、却って鋭敏化した言語形式への意識が、フェミニストユートピア小説に、「家父長的秩序を暴」く破壊性と、新しい空間への強い構想力を与えたと考えられるのではないだろうか。

5. Female man はどこから来たか

小説のタイトルとなっている female man という言葉は、Jonathan Swift の *Gulliver's Travels* (1726) 第四篇フウイヌ

ム国渡航記中に言及があることは注意を要すると思われる。フウイヌム国渡航記は、エリート主義的で硬直した身分制のもとに平和で合理的な社会を営む高貴で知的な馬の種族に関する物語であるが、イギリスの貴族制を諷刺していると思われる。この記述中に、イギリスは female man によって統治されているというくだりがある。(Swift, IV.4) Swift は、本来男の権限である統治権を持つ女を「女であるが男のような存在」すなわち female man と揶揄したのであろう。当時イギリスを統治していたのは女王アン・スチュアートであった。

Russ が、社会諷刺として書かれた幻想小説であるガリバー旅行記中の記述からタイトルを借用したことはきわめて示唆的であると言えるだろう。Swift のガリバー旅行記と同じように、この作品では、全く違った社会システムを読者が主人公達とともにあちこち移動しながら観察するという構造になっているからである。そして、全く違った複数の社会構造を寓話的に提示し、現在の社会に対する諷刺として描いたという点で、ガリバー旅行記と、*The Female Man* は共通していると見ることができるのではないだろうか。

6. 1969 年から 70 年代のアメリカ

The Female Man においては、4つのパラレルワールドが存在する。すべて地球 (the Earth) 上にあるが、歴史が全く違うという設定である。ただ、「現在」と設 1969 年であることは、注意を要する。1969 年は、おそらくこの作品が書かれた時代であろうと考えられるが、それはすなわち、1969 年が Russ にとっての「いま」であったということである。

1969年のアメリカは、ベトナム戦争のさなかであり、反戦運動とヒッピームーヴメントが盛り上がる中、女性解放運動はやっと市民権を得ようとしてはいたものの、まだ社会の主流で安定した認知を得るには程遠い状況であった。性の革命が始まっていたとはいえ、同性愛、特に女性の同性愛に対して、社会的認知はほとんどなかったと言ってよいだろう。女性自身が選択できる妊娠中絶の権利への運動という、女性解放運動の大きな節目となるべきことは、アメリカではしばしば激しい反対・批難の的となり、多くの女性たちはこっそりといかがわしい中絶手術を受けるか、自分で無理な中絶を試みて、その結果死亡するという痛ましい事件が多く起きていた。そういう社会的文脈が、この小説の通奏低音として響いていることは、1969年から40年後の今読み直す作業において、時代の変化を感じさせ、また、依然として変わらないものもあることも感じさせるのである。

7. 4つのパラレルワールド

*The Female Man*の4つのパラレルワールドは以下の通りである：

1) 1969年のアメリカ、第二次世界大戦が起こっておらず、大恐慌が続いている。社会は抑圧的で、女性解放運動は一切起きていない。これはフェミニストの立場から見ると、過去のおぞましい時代ということになるだろうし、Russ自身が体験した保守的な50年代アメリカの抑圧的な空気を感じさせるものでもあると考えられる。

2) Whileawayの世界。今から1000年後。男性は疫病で死に絶え、一つの種類の性(female)しかない。女性は女性同士でカップルを形成し、出産し、子育てをし、働

く世界である。つまり、同性愛は当然のこととして受け入れられている。質素であるが概して平和でエコロジカルな田園世界であり、ユートピアとして設定されていると考えられる。

3) 近未来の地球。男だけのManlandと女性だけのWomanlandの間の戦争が数十年続いており、社会は緊張と憎悪が充満し、食糧事情も悪く、地球は汚染されている。性的対象として依然として異性を求める傾向があり、去勢された男がマンランドで女性的役割を果たし、ロボットミーで自由意志を失った男がWomanlandで性的奉仕をするという現象が生じている。ManlandはWomanlandで(飼い慣らされた)男との間で生まれた少年を買ってきて育てるという形で人口を維持している。2)がフェミニストユートピア的世界であるならば、3)はその反対のディストピア的世界であると見ることもできるだろう。

4) 現実のアメリカとほぼ同じ世界。つまり、2つの1969年のパラレルワールドと、はるかな未来の、おそらく女性にとってのユートピア的世界として想定されている女性だけの世界であるユートピア的Whileawayと、「いま」よりすこし未来にある、男性と女性が最も激しく殺戮し対立しているディストピア的世界の4つが舞台となっているわけである。

8. 戦争・暴力と4人のJ

戦争・殺戮・暴力が、このパラレルワールドでは、重要な変化の鍵を握っている可能性が示唆される。1)の世界は大恐慌が続き、ニューディール政策が続く1969年のアメリカであるが、4)との大きな違いは、ヒトラーを指すと考えられる

Shicklgruber が 1936 年に死亡し、第二次世界大戦は起きていないことである。この世界は、保守的な社会であり、4) のアメリカを揺さぶった公民権運動は起きておらず、露骨な男性優位主義の世界であることが、人種差別が続き、アフリカ系アメリカ人を蔑称 (negro) で呼んでいることや、女性が長いスカートをはき、常に職業よりは結婚を意識していることなどから推察できる。経済的な困窮は明らかで、テレビはなく、ラジオを聴いて、配給の本を読み、家には電話がないので公衆電話を使い、闇市が存在したが、政府の店以外ではめったに食料を買えないため、果物などのぜいたく品は買えない。

歴史上、1930 年代に WPA=公共事業推進局はルーズベルト政権下で政府支援の援助計画を実施したが、その同じ WPA. の事業システム下で、図書館司書として働くのが Jeannine Dadier である。彼女には Cal という男友達がいるが、結婚に踏み切るまでの関係とはいえない状態で、かといって仕事に打ち込むというわけでもなく、受け身の存在として周囲に受け入れられる「良い娘」として生きている。

戦争がしばしば経済を活性化し、第二次世界大戦中に男性が戦場に赴いたために、女性が労働力として、初めて社会の中心的役割を短期的にはあるが担うことが社会的要請となった、という事実が、後に女性解放運動を準備する基礎を形成したということは皮肉なことである。つまり、ヒトラーが死んだことは、ホロコーストを生まなかったという良い結果だけでなく、皮肉にも社会経済の停滞と社会の保守化と家父長制の存続、女性の抑圧を導いたこと

になるわけである。

3) の世界で、男女の対立で世界が二分され、対立が 40 年間膠着状態となっていてという設定は、当然アメリカが 1969 年当時直面していた東西対立を反映していると考えられる。皮肉なことに、この戦争状態にある 3) の世界は、1) の世界に劣らず物質的には豊かとは言えないが、少なくともその世界で人類学者として、そして秘めた動機を抱いて、他の 3 つのパラレルワールドに接近するのが、女性である、変装の名人の Jael Alice Reasoner である。彼女はその名前が示唆するように、理性 (reason) に基づいて行動している。ひたすら受動的な Jeannine と対照的に、自分の意志で移動し、世界の変革を求めて他のパラレルワールドへ接触を求める。

3) の戦争の結果もたらされたのが 2) の Whileaway である。一種のユートピア的女性世界として描かれるこの世界は、3) の戦争により、男性が死滅したことによって可能となった世界である。しかも、後に Jael が明らかにするように、Whileaway は、2) の世界で起きた男性を生物兵器で皆殺しにするという大殺戮の結果生まれたのである。Whileaway は、田園世界、牧歌的な農業世界であり、いいかえるとアメリカの田園的理想の世界とも言えるが、保安官である働く Janet Evason は、職務としても、決闘としても、何人も人を殺してきた。アメリカの田園的理想を女性だけで実現したかに見える Whileaway も、決して非暴力の世界ではない。この 3 つのパラレルワールドはみな、戦争・暴力・殺戮がその世界の成り立ちに大きく関わっている。

Joanna は 4) の世界に生きている “female man” である。作家自身の名前と同じことから推察されるように、彼女は語り手、解説者として著者の代弁者となり、さまざまな世界へ読者の道連れとなって、ガリバーのようにめぐるのである。

このように、4つのパラレルワールドには4人のJという共通の頭文字を持つ女性たちが主人公として現れ、遭遇し、行動をともにするようになる。作品の途中からは、この4人のJは、しばしば重なり合い、そこにいるのに見えないこともあり、あたかも一人の人間の4つの顔のように描かれることがある。そのことは、Russ が4人に与えた名前を考えると、その寓意がより明らかになるのである。

9. Jとは誰か

主人公の名前と著者の名前を同じにすることで、虚構／現実を曖昧にするだけでなく、同じ名前のヴァリエーションを4人に名付けることによって、実は4つのパラレルワールドにいるのは同じ人格ではないかという疑いを読者に抱かせるような仕掛けがなされているのではないか。

実はこの4人の名前はすべて唯一神 Yahweh を語源として構成要素に持つ名前である。その男性形は John, Jonathan などである。洗礼者ヨハネの英語形は John であり、ヨハネのラテン語名 Johannes の女性形 Johanna、その変化形に Joanna, Jeanne, Janet などがある。(梅田 11-19) つまり、Joanna, Janet, Jeannine, Jael はみな、John の女性形であり、「存在」するという意味をもつ Yahweh を語源とする名前のヴァリエーションであったのである。そうすると、4人のJにはヨハネが重ね合

わされていると考えることは、この荒唐無稽な物語の中で、それほど突飛ではないかもしれない。

Joanna とヨハネが同じ名前であることから、第9部第1節に一行だけ「これはジョアンナの本である」(This is the Book of Joanna) と書かれているとき、読者は、ヨハネによる福音書 (the Book of John) を想起するだろう。第1章6節の「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである」(There came a man, sent from god, whose name was John) (下線部筆者) の “man” を “woman” に、“John” を “J” たち” に入れ替えて、7節の「彼は証し(witness) をするために来たが、(中略) 民は受け入れなかった」(ヨハネ 1:11) を読めば、J たちの「証言」が 1969 年の社会で受け入れられなかったことを含意しているかもしれない。

10. レズビアニズム

女の同性愛が 1969 年のアメリカでは受容されてはいなかったことと、それもひとつの関係として可能であることを Russ は繰り返し描いている。Joanna は Whileaway からやってきた Janet を、1969 年のアメリカ社会に適応できるよう「改造する」(Russ, 30)。Janet は、好奇心は持つものの、男はまったく別の種であって、自分と近いもの、女に恋ができないことに怒り、Joanna にキスする。Joanna が拒否して Janet を蹴飛ばすと、Janet は拳で壁を破ってしまう。この滑稽な場面は、Janet の暴力性だけでなく、1969 年のアメリカにはレズビアンには「壁」があるということをも寓意しているとも考えられるのではないか。Joanna は当初、同性愛を受け入れ

ないが、その後、Laura いう若い娘と Janet が性的な行為に至ると、Joanna はその場面を「目撃」(witness)し、第9部では Joanna 自身が Laura を愛撫し、自身が「レズビアンである」ことをいわば「証言」する。最後には同性愛者としての Joanna が立ち現れてくるという仕掛けなのである。たしかに「これはジョアンナの本だ」と言えるかもしれない。Joanna 自身が同性愛者としてのアイデンティティを受け入れるに至るある種の「福音」の書であると言えるかもしれない。

11. 寓意される名前

まさにガリバー旅行記さながら、Joanna のニューヨークの高級住宅地のパーティーに Janet が現れたとき、滑稽でいて、極めてリアルな「いま」のアメリカの描写には、Russ の寓意が溢れている。女性の名前はすべて寓意的である。まさにヨハネ福音書の「万物は言によって成った」(ヨハネ 1:3)の通りに、女性の存在が名前によって定義されている。三度の離婚歴のある Sposissa は配偶者を意味する spouse を含意する。「つけまつ毛のために目をあけてられない」Aphrodissa は性愛の神アフロディテ (Aphrodite) に由来する。Clarissa が「自殺するでしょう」と予言されるのは、男に犯されて自殺する Richardson の小説 *Clarissa* の主人公と同名だからである。両生類を意味する *amphibia* が両性愛を含意するから、「もちろん私たちはアムフィビオッサも招きません。理由は言わずもがなです」(Russ,34)ということになるのだ。

女性達はそこで<かれの恋人> (His Little Girl) ゲームをするが、「私はあなたの恋人よ」というと、「それじゃあなたも

ばかにならないと」と言われるわけだが、「恋人」になるためには、男より小さい (little) すなわち、劣った存在になることが求められるという、女性の置かれた立場を諷刺した場面である。(Russ,35-6) <ひどいわね> (Ain't It Awful) ゲームは、家事を評価しない男へのぐちを言い合うが、それに対して、男は「君たち女性は幸運だよ、外に稼ぎに出かける必要がないんだからね」(Russ,35)と応じるというもので、女性の社会的な立場を諷刺している。

12. Joanna の痛みと統合

いささか陽気な女性の立場への諷刺に対して、おそらく作者 Russ の声と重なるように見える Joanna のむきだしの苦悩が語られるとき、陽気さは影を潜め、痛みが生々しくなる。「博士号、教授の地位、(中略)私が健康で背が高く、美しく育った時、IQが200を越した時、非凡な才能を持ったとき」(Russ, 133-4)でさえ、女であることは彼女を苦しめた。「女性であることは、鏡であり蜜つぼであること、召使いであり裁判官であること」(Russ, 134)から逃れるすべがない。自分の内にいる女が自分を否定するからである。「パパはあんたを愛しやしないよ」「男の子たちは君なんかと遊ばないよ」「誰もあんたとは結婚しないよ」「あんたは子供がいなけりゃ一人前じゃないよ」(Russ,135)という声が自分自身の内なる声となって、傷つけ、「私は病める女、気違い女、手に負えない女、人食い人種」(Russ, 135)であるという裁きを自分自身に下すことになる。女であること自体が、苦痛をもたらすのだ。

その後、Joanna が female man になったプロセスは、いわば統合のプロセスであ

る。「ほかに何ができる？—もしあなた自身をあなた自身の名かを通してあなた自身の中に入れ、そしてあなた自身の外に出る、つまりあなた自身を裏返しにし、あなた自身に和解のキスをし、あなた自身と結婚し、あなた自身を愛すれば—そう、私は男(man)に変わったのだ」(Russ,139)「ひどい苦痛を味わいながら、私が後年学んだものは、私たちに欠けているもの、したがって私たちが必要とするもの、したがって私たちが望むものを所有するためには、方法はたった一つしかないということだ。それになること、だ。」(Russ,139)ここで男(man)になるということは、性別での男ではない。何かが本質的に欠けている存在である女から、一人の人間として充足した人間になるという意味だろう。”man”が社会的に一人前の人間を指すのは、公民権運動とフェミニスト運動とが共有するものともいえるかもしれない。

13. J (たち) の声

4つのパラレルワールドのJはまた別れていき、最後のJoannaの言葉、「行きなさい、小さな本」(Russ,213)で結ばれる。Russ自身、作品内の登場人物を行き来して、さまざまな違ったパースペクティブを読者に提供すること、「すべての^{ヴォイス}声に語らせること」(Shervintvton)を重視していると述べている。つまり女たちが単一の声では語れない、恐怖、欲求、願望、意志を持っていることを提示する形式として、いささか荒唐無稽な形で、その恐怖をJeannineに、欲求をJaelに、願望をJanetに、意志をJoannaに具現化したと読むこともできるだろうし、あるいは3人のJはすべてJoannaの恐怖、欲求、願望を具現

化しているとも読めるだろう。

読者は、ガリバー旅行記の読者のように、パラレルワールドを行き来しながら、読者の「いま」を振り返る。この本が「風変わりで古くさくなった」ら、「その日こそ、私たちは自由になるのだから」(Russ,214)というRussの願い通り、この本に描かれている女性の痛みは古くさいものになったのだろうか？私たちがもうくかれの恋人>ゲームはしていないのか？<ひどいわね>ゲームをしたことのない女性はいのだろうか？この本がもはや理解されなくなった時は、まだきていないように思われる。彼女の問題提起は今も有^{レゾナント}効ではないだろうか。残念ながら。

Works cited

- 梅田修 ヨーロッパ人名語源事典 大修館書店
2000年
- Russ, Joanna. *The Female Man*. Beacon Press, 1975
- Sargent, Pamela. *Women of Wonder: The Classic Years*. Harcourt Brace & Co, 1995.
- Scholes, R. and E. S. Rabkin. *Science Fiction: History-Science-Vision*. Oxford UP, 1977
- Shervintvton, Sharon. "Letting All the Voices Speak." *New York Times Book Review*, 31 Jan. 1988
- Swift, Jonathan, *Gulliver's Travels*. 1726
- Richardson, Samuel. *Clarissa, or The History of a Young Lady*. Penguin, 1747-8, 1985
- Teslenko, Tatiana. *Feminist Utopian Novels of the 1970s: Joanna Russ & Dorothy Bryant*. Routledge. 2003
- Wild, Oscar. *The Soul of Man under Socialism*. Boston: John W. Luce, 1910
- 聖書 新共同訳, 日本聖書協会, 1996年